



紫芳会だより ～輝く先輩達～
NPO法人東京多摩いのちの電話 理事
村守 黎子 氏 (高校10期)
むらもり れいこ

1985年～ 東京多摩いのちの電話に関わる
1990年～ 後輩の研修にも関わる
2007年～ 東京多摩いのちの電話の広報を担当
2015年3月まで 広報委員長

No.33
2015.6.1.発行



広報誌「つなぐ」
東京多摩いのちの電話の
HPからご覧いただけます

「いのちの電話」を知っていますか？

「いのち」などと言う大げさな言葉に、引いてしまう感じがあるかもしれません。どんな事
をしている所か、簡単に紹介しましょう。

誰にも話せない、誰かに相談したい…そういうときに匿名で、電話で、相談できる機関です。自殺予防のみならず、どんなことでも、話すことを通して、なんらかの道を見出してもらうことを願いながら、年中無休で電話を受けています。1969年、日本に始めていのちの電話が開設され、現在50センターが各地で活動しています。多摩地区には、1985年、東京多摩いのちの電話が誕生し、以来30年間、450,000件にのぼる電話を、900人のボランティア相談員が受けてきました。

ボランティアについて

今回のこの記事はいったい何だ？とお思いの皆さんに、自己紹介も含めてもう少し説明しなければなりませんね。私は10回卒で、皆さんにとってはお祖母さんの世代です。この歳になってもまだまだ多くのことを、ボランティアを通して学んでいることをお伝えしたいと思います。

相談と言うと、話を聞いてあげる、或いは、聴いてもらうと考えがちですが、いのちの電話の相談とは、並んで座ってその人の話を聴くようなものです。その人自身が問題を解決していくのに付き合うことなのです。“上から目線”は×。年齢や立場、社会的な地位などに関係なく、人は人として尊重し、接することを、自分を知るという厳しい研修を経て、身をもって学びました。

また、ボランティアは、その仕事をすると自ら名乗り出たことですから、自分の担当を責任を持って遂行しなければなりません。自分の都合優先でよいものではないのです。むしろ、ボランティアだからこそ厳しく自分を律して、ことにあたらなければならないともいえます。などなど、ここに書きつくせないほどの多くを学びました。

いのちの電話のボランティアは、単に相談活動だけではありません。必要なすべての資金を、ボランタリーな資金に頼っています。寄付集めに奔走するのもボランティア。台所事情はいつも火の車ですが、多摩いのちの電話は30年間休むことなく活動しています。人のために少し役立ちたいという思いがあれば、かなり大きな活動が実を結ぶという実例を目にしたのは私にとって驚きです。

立川高校とのつながり

30年前、私は多摩いのちの電話に、一期生として参加しました。同じ仲間、立高卒8回生の馬場孝子さんがいらっしゃることを知ったのは、馬場さんとの何気ないおしゃべりからでした。立高で、同じ時期に、校庭ですれ違っていたのですね。また多摩いのちの電話で、いつも一緒だったOさんと、同窓会で会ったときは、おたがいびっくりしながら同じ志を共感しました。更に、いのちの電話の全国大会で、他センターから出席していた同期卒のSさんにばったり会ったこともあります。いのちの電話に関わっていると公言はあまりしないので、もっと多くの卒業生がひそかにこの分野で活動していると思われまます。

卒業生の多くの方が、ボランティアという地味な分野でがんばっていること、目立たなくてもこの社会で自分を役立てる場があることを、この小文で、皆さんが知る機会になれば、と願っています。

東京多摩いのちの電話のHP <http://www.tamainochi.com>